



新宿村の佇まいを伝えるまち並みー江雅織物・笠盛・三吉湯

新宿村（現在の三吉町・錦町・浜松町・新宿）は、元亀2年（1571）元宿町が渡良瀬川の大水害を受けたことにより、新たな地を開拓し作られた集落。最勝寺（錦町）の門前から東へ延びる形で集落が形成され、「元宿」に対して「新宿」と名付けられた。新宿村には渡良瀬川から引かれた水路が流れ、大正時代には水路に沿って200台以上の水車が設置された織物産業の集積地でもあった。

江雅織物の大正15年（1926）ごろに建設されたノコギリ屋根工場では、桐生織伝統工芸品の帯が生産されている。桐生織の7つの技法のうち緯綿、軽綿、風通織、浮経織などの伝統技術によって生産が行われ、ノコギリ屋根工場と機音が新宿村の情景を伝えると共に、桐生織伝統の技術も後世に脈々と伝えている。

笠盛は、明治10年（1877）に笠嘉織物として織物業を始める。昭和37年（1962）ごろからは織物業から、刺繍業一本に専念し、近年では、刺繍技術を駆使したテキスタイル・アクセサリーの自社ブランドをスタート。3連のノコギリ屋根工場がかつての雰囲気をかもし出す一方で、若いアイデアとこれまで培ってきた加工技術の融合による時代に即した事業を展開している。

織物産業の一大集積地であった新宿村には、事業の拡大によって多くの従業員が集まり、女性従業員用の寄宿舎を構える機屋も多かった。独特な西洋風建築で地域内でも異彩を放つ三吉湯には、1日の汗を流す従業員たちで賑わったという。最盛期には桐生市内に40件以上あった銭湯も、現在では4件のみとなったが、三吉湯は繊維産業の隆盛と密接に関連する施設であり稀少な公衆浴場の遺産でもある。

昭和4年（1929）には三吉町へ町名が変更されるが、現在も生業を営む江雅織物、笠盛、三吉湯は当時の織物が紡いだ一連のストーリーを伝えている。

所在地 桐生市三吉町1丁目

所有者 江原毅（江雅織物）・笠原康利（笠盛）・大石八郎（三吉湯）